

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 嶺南地方の6～7世紀代墳墓出土鉄鐸に関する研究： 論文翻訳

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 東淑, 高, 慶秀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001970">https://doi.org/10.57529/00001970</a>

【論文翻訳】

# 嶺南地方の6～7世紀代墳墓出土鉄鐸に関する研究

※原文掲載誌・『慶北大学校考古人類学科 20 周年記念叢』(慶北大学校人文大学考古人類学科、2000)

金 東 淑  
(訳：高 慶秀)

## 要旨

本稿は嶺南地方の墳墓とその他の遺構から出土した鉄鐸について概括し、鉄鐸所持者の性格に関して論じた内容である。鉄鐸の出現時期に関しては、三韓時代まで遡れるが、鉄鐸が出土した古墳の構造は、横口・横穴式石室墳が主で、6世紀代に集中的に副葬され、7世紀の前半以降、急激にその数が減少して行ったと分析している。分布範囲は6世紀前葉には洛東江の以東地方に限定されていたが、中・後葉を経て、新羅に服属された加耶の故地をはじめとする漢江流域まで、新羅へ新たに編入された領域に拡大する様相が確認されるとした。6世紀前葉の資料が最も多く、その型式が多様であるという点で、これらの鉄鐸が洛東江の以東地方の各地で現地生産された可能性が非常に高いとみている。6～7世紀代における鉄鐸の性格及び所持者の職能については、出土位置が被葬者の腰の付近である場合が多く、表面に付着している布の痕跡から、この遺物が被葬者の腰の所に装着された可能性が高いという点に注目している。鉄鐸の共伴遺物として、退化型式の樹枝形帯冠に関しては、政治的な首長権として象徴されていた金銅冠の性格が政治・軍事的な意味を喪失し、宗教的な意味のみを持つものにその性格が変化したとみて、専門巫俗人の登場の背景を示す資料として理解し、鉄鐸所持者を専門巫俗人である可能性が高いと結論づけている。

## キーワード

鉄鐸、嶺南地方、横口・横穴式石室墳、退化型式樹枝形帯冠、専門巫俗人

## I. はじめに

6世紀代に入ってから、嶺南地方の墳墓は横口・横穴式石室墳という追加葬を前提にした墳墓の型式へと一変する。これに関連しては、仏教公認、殉葬禁止令、律令頒布のような社会全般的な変化を背景に、お墓に対する観念、すなわち当時の人々の来世観が変わったことにその原因が求められている<sup>(1)</sup>。このような来世観の変化は、厚葬から薄葬への副葬様相にも影響を与えたが、むしろこの時期に新たに副葬が増加する遺物として鉄鐸がある。

鉄鐸は、1980年代までは異形鉄器か不明鉄器として報告されるなど、その用途について全く認識されなかったが、1990年代以後、その数が増加するにつれて、鉄鐸と命名されはじめた。しかし、今日までの研究傾向は発掘調査報告書での若干の考察、または横口・横穴式石室墳の研究において断片的な内容で扱われる程度にすぎなかった。

近年、急激に鉄鐸の報告例が増加するにいたって、これらの資料を基にした基礎的な検討が必要とされるようになった。本稿の目的は、6～7世紀代に副

葬が急増する鉄鐸の出現の背景と鉄鐸所持者の性格を推論することである。研究の時空間的な範囲としては、嶺南地方の6～7世紀代の墳墓出土資料を対象に、その他に6世紀中葉以降、新羅の政治領域が拡大した坡州地域も含むこととする。鉄鐸の部位別の名称に関しては、通用している用語を聚合して図1のように使用することにしたい。

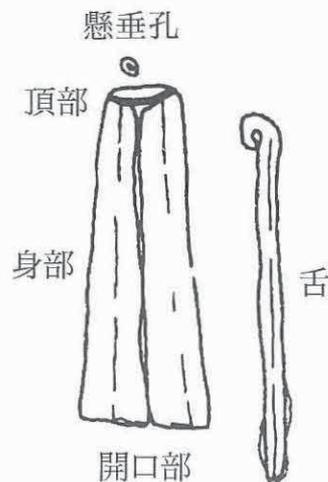


図1 鉄鐸の部位別名称

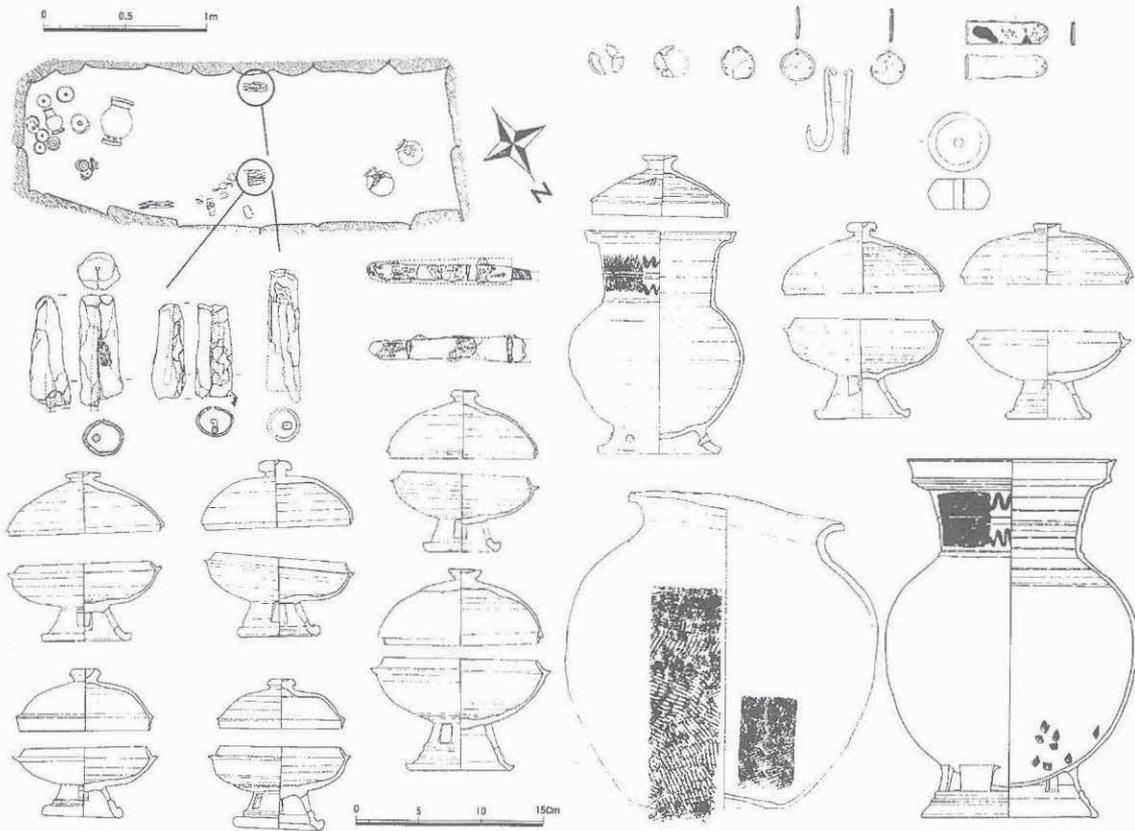


図2 慶州・新院里2号出土遺物

## II. 資料検討

### 1. 資料紹介

#### 1) 慶州

##### (1) 皇南洞 106 - 3 番地 4 号<sup>(2)</sup>

主軸が東西方向の積石木槨墓である。頭位は東で、遺物の大部分は頭部付近で出土した。鉄鐸は遺物群点は木槨の上においてあったのが崩れ落ちたものである。独立した2個体分を含めて全部で4点が出土した。鉄板を扇子形に切って両端を円錐形に巻き、上部を折り曲げて頂部を設けた。頂部の中央には舌を吊るすための懸垂孔が1個空いている。舌の断面は長方形で、身部外面には布の痕跡が残っている。全長5.2cm、開口部径2.5cm(図12-3)。

副葬遺物中に装飾類はないが、遺構中央の人骨の側から鉄鋌2点、足元から刀子1点がみつかった。人骨は分析の結果、成年の女性と確認された。遺構の年代は二段透窓高杯を基準にした場合、慶山林堂造永1B-6号<sup>(3)</sup>よりは後出する形式であるが、大きな時差はないと思われる。

##### (2) 新院里2号<sup>(4)</sup>(図2)

この古墳群で最も大型の横口式石室である。主軸は東西方向で、石室の規模は長さ255cm、幅95cmである。鉄鐸は石室から銜帯一括、紡錘車、刀子2点と共に出土した。出土位置からみて、鉄鐸は被葬者の腰の付近と推定され、東端壁の土器群とは別途の副葬空間に該当する。共伴する銜帯の圭形鐸尾長面に明絨布の痕跡があることから鉄鐸は布で装飾された銜帯に装着されていた可能性がある。全長7.4cm、開口部径2.5cm×2.6cm～2.9cm×3.3cm。

#### 2) 漆谷・大邱・慶山

##### (1) 漆谷 多富洞21号<sup>(5)</sup>(図3)

主軸が南北方向の竪穴式石槨で、規模は長さ150cm、幅50cmである。北端壁側から土器類5点と紡錘車、遺構の中央の位置から鉄鐸2点が出土した。鉄鐸は2点とも皆少し欠けているが、扇形の鉄板を叩きまげて両繋ぎ目を貼り付けた後、狭い頂部は巻いてある。舌との連結部が欠失していることから断定はできないが、端部を丸く折って輪を作り、

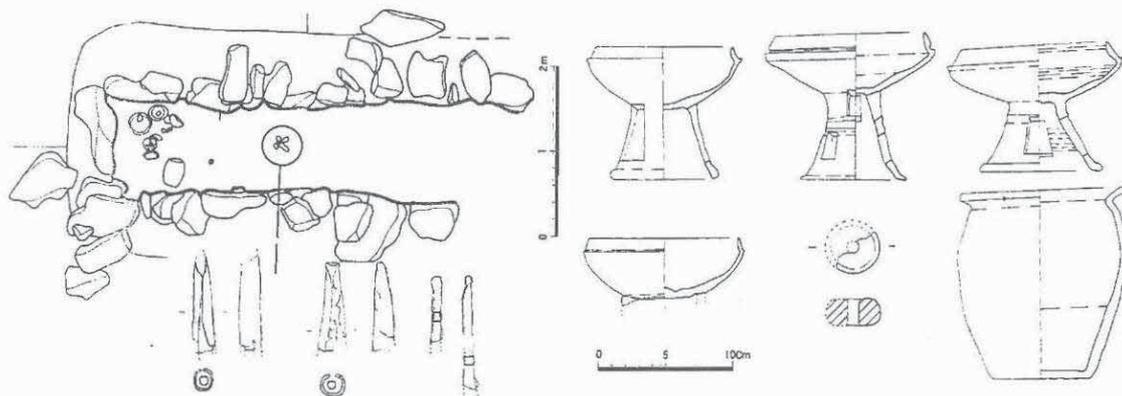


図3 漆谷・多富洞21号出土遺物

その輪に紐を繫いだものと推定される。舌の断面は方形である。現長7.2cm、開口部径2.2cm。

## (2) 大邸 佳川洞168号<sup>(6)</sup>

主副槨式の竪穴式石槨で、主軸はN-60°-E方向である。石槨の規模は長さ380cm、幅90cm、残存深さ25cmである。主槨の東端壁から多量の有蓋高杯・台付長頸壺・軟質甕・土製紡錘車が、土器の南側からは金銅製樹枝形帯冠が出土した。また金銅冠の北側から鉄鐸1点が、被葬者の頭蓋骨の付近から金銅製太環耳飾1対が、被葬者の足付近からは有刺利器と曲刀子が各1点ずつ、副槨からは短頸壺3点が出土した。鉄鐸の細部形態と大きさに関してはまだ報告書が刊行してないことからわからない。

## (3) 慶山 造永1B地域6号<sup>(7)</sup> (図4)

主軸が北東-南西方向の中央羨道の横穴式石室である。石室の規模は長さ280cm、幅195cm~210cmである。遺物の出土位置は盗掘による攪乱から原状から外れている。遺物の種類には各種土器類と鉄鏃、刀子、鉸具、鋸(締め金)、有刺利器、雲珠、金銅製冠飾片、金銅製耳飾などがある。この中で金銅製冠飾片は3点の鉄鐸に付着した状態で出土した。鉄鐸は右側壁中央部近くから雲珠、刀子と共に出土したが、この位置は棺台の中央部に該当するので、被葬者の腰部にあたる。鉄鐸は3点とも鍛造製で、鉄板を丸く巻いて身部を設け、外面には布の痕跡がある。舌は端を丸く巻いた輪状であるが、鉄鐸の頂部を別途に作っていないので、身部と舌がどのような方法で繋がっていたかはわからない。全長5.2cm~

6.0cm、開口部径2.5cm~2.8cm。

## 3) 釜山

### (1) 徳川洞C地区13号<sup>(8)</sup> (図5)

主軸が南北方向の横穴式石室で、石室の規模は長さ250cm、幅97cmである。出土遺物としては高杯、蓋、把手付杯などの土器類と鉄鏃、刀子、鉄斧などの鉄器類がある。鉄鐸は2点出土したが、西長壁の中間地点の近くから一字形に並んで副葬してあった。鉄鐸は身部の上下幅が1:1の円筒形で、舌は残っていない。頂部は身部の上端を方形に折って設けており、1点は開口部がC字形に切り取った状態である。全長8cm、開口部径3cm~3.5cm。

### (2) 機張清江里11号<sup>(9)</sup> (図12-11)

主軸が北西-南東方向の竪穴式石槨で、石槨の規模は長さ395cm、幅145cmである。鉄鐸の出土位置は明らかではないが、遺構内部の出土遺物として、高杯と軟質甕などの土器類の他に刀子、鎌形刀子、鋸片、金銅製細環耳飾1点がある。鉄鐸は1点出土したが、身部が比較的細長い方である。中に舌は残っているが、連結状態は明らかではない。頂部の形態に関しても特別な説明はない。全長8.5cm、開口部径2.1cm。

## 4) 梁山

### (1) 北亭里<sup>(10)</sup> 4-カ号

主軸が南北方向の横穴式石室で、石室の規模は長さ390cm、幅120cm、高さ140cmである。遺物は南側端壁の下から高杯、長頸壺、短頸壺、鉢形器台

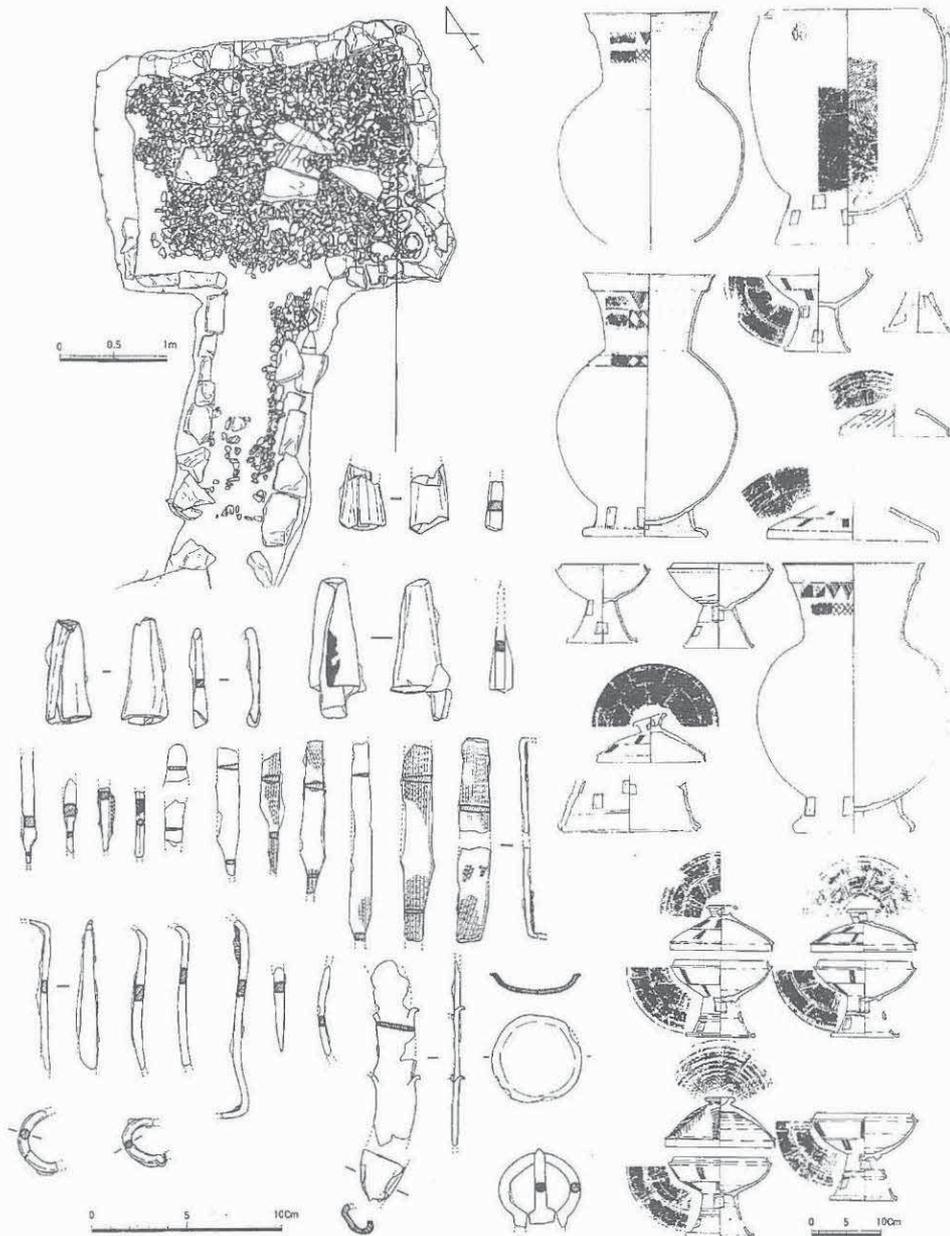


図4 慶山・林堂・造永 1B-6号出土遺物

などの土器類が、尸床の中央部からは金銅製装身具、鉄鐸、鑿、鉄斧、小刀子などの鉄器類が出土した。鉄鐸は2点出土したが、2点とも皆円筒形で、頂部が丸く裁断されている。舌は残っていない。全長4.3cm～5.6cm、開口部径2.0cm～2.3cm。

### (2) 北亭里 8号

主軸が南北方向の横穴式石室で、石室の規模は長さ380cm、幅130cm、高さ150cmである。遺物は両端壁部から出土したが、鉄鐸は北端壁から鐙子、轡、鉸具と共に出土した。その他の共伴遺物として青銅

鈴1点が含まれている。鉄鐸は1点出土したが、頂部が丸く裁断された形態で、身部の中に舌は残っていない。全長4.8cm、開口部径3cm。

### (3) 北亭里 10号

主軸が北西-南東方向の横穴式石室で、石室の規模は長さ350cm、幅130cm、高さ140cmである。遺物は入口付近から長頸壺、高杯、紡錘車、鉄鐸、U字形輪、鋌などが共伴出土した。鉄鐸は1点出土したが、舌は残っていない。頂部は完全に折られており、身部の上位に三角状に近い形態で折り畳まれて

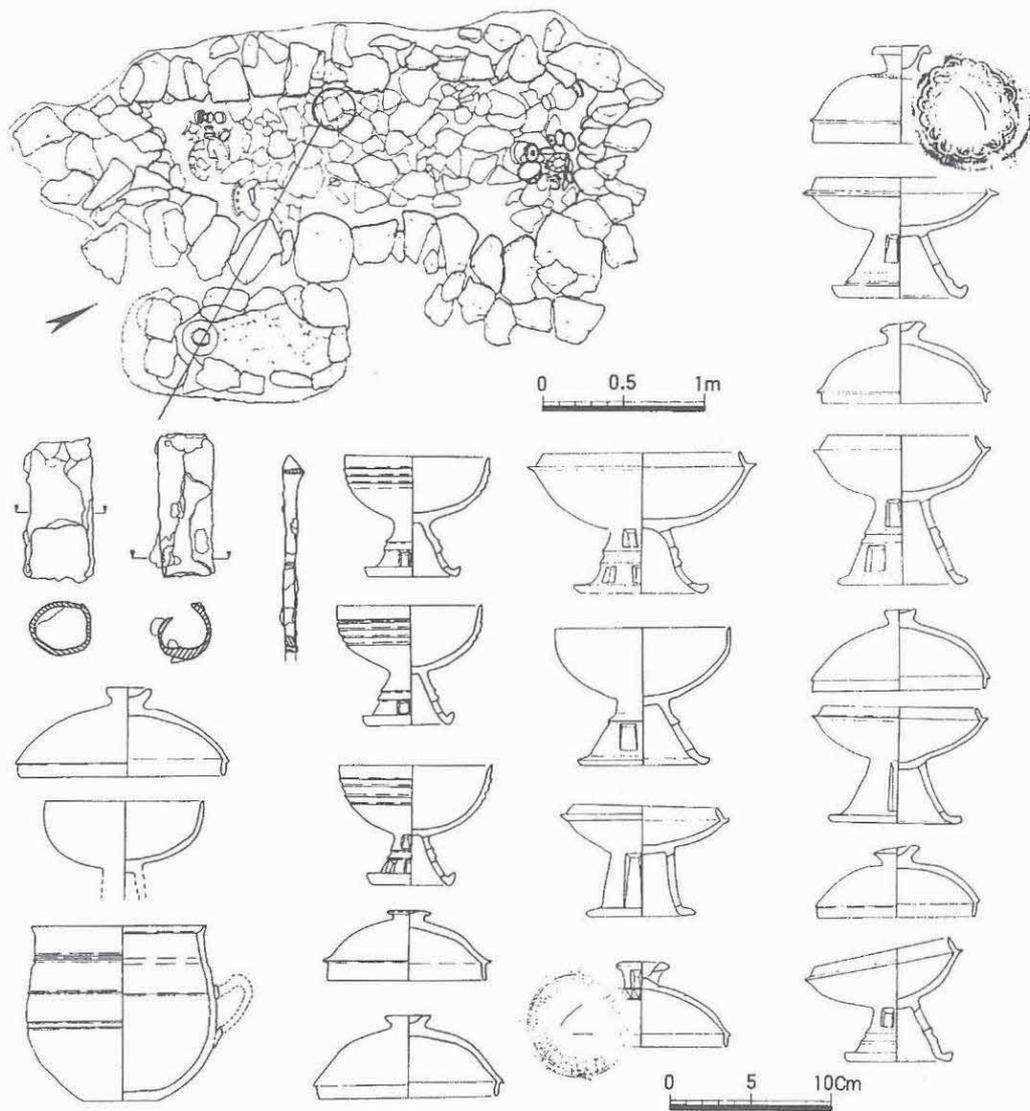


図5 釜山・徳川洞C地区13号出土遺物

いる。全長4.8cm、開口部径2.1cm。

この他に北亭里12号からも3点の鉄鐸が出土したが、みな舌が残っていない。頂部の形態もはっきりしていないが、三角状に近いものと円形と推定されるものがある。全長4.8cm～5.8cm、開口部径2cm～2.8cm。新基里25号横口式石室からも鍛造製鉄鐸1点が出土した。

## 5) 安東

### (1) 枝洞2号<sup>(11)</sup> (図6)

主軸が東西方向の横口式石室と推定されるが、石室の規模は長さ258cm、幅110cm、高さ75cmである。東側端壁部から金銅製樹枝形帯冠と金銅製腰佩、鉄輪、棒状金具などの遺物と共に鉄鐸2点が出土した。鉄鐸は扇形の鉄板の両側面を丸く曲げて円錐形にし、

上部の端を折って頂部を設けている。頂部には舌を吊るすために2mmほどの大きさの懸垂孔をあけている。舌は断面が方形の鉄棒であるが、端部を丸く曲げ、紐をかけて吊るせるようにしている。枝洞2号の鉄鐸は金銅冠と共に被葬者の頭部から出土した。全長7.3cm～8.65cm、開口部径2.6cm～3cm。

### (2) 坪八洞1号<sup>(12)</sup> (図7)

主軸が北西-南東方向の横口式石室で、石室の規模は長さ448cm、幅221cm、高さ175cmである。後壁の東側から金銅耳環2点が出土したことからみて、頭位は東側と推定される。鉄鐸は西長壁から90cmの位置から出土したが、この地点は尸床の中央から少し西側に偏ったところ、すなわち被葬者の腰の部

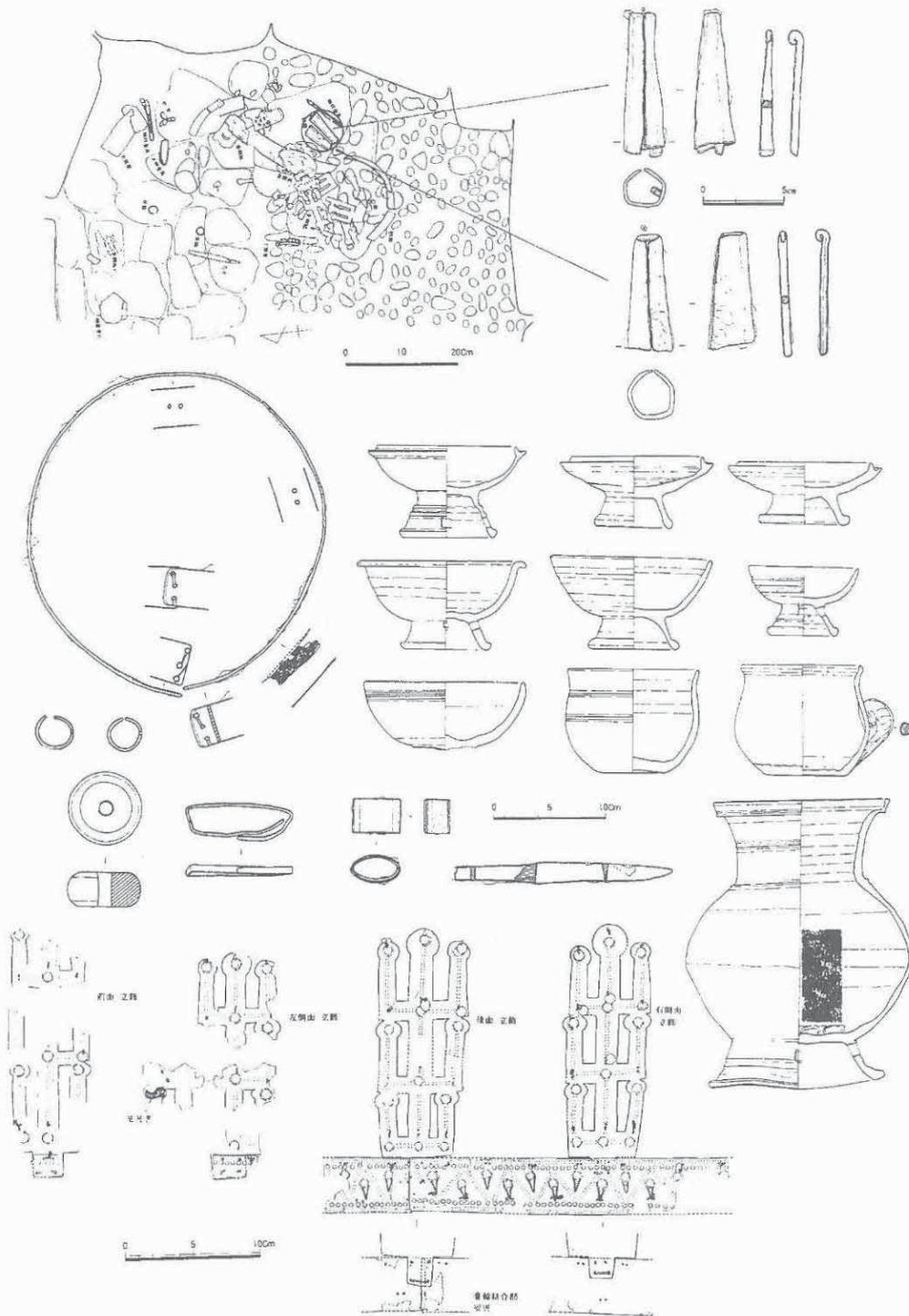


図6 安東・枝洞2号出土遺物

分に当たる。ここでは2点の鉄鐸が出土したが、2点はみな大きさが近似しており、全体的な形態は円錐形に近い。頂部は片方の端を巻いて貼り付けており、舌は鐸内面に付いている。開口部にはM字状の溝が作られている。鐸の外面には皮の痕跡と共に太い糸と細い糸を縦横に編んだ布跡がよく残ってい

る。皮跡の下から開口部までに数十本の太い糸がぶらさがっていたと推定される。全長5.5cm、開口部径1.7cm。

## 6) 清道

(1) 萼池里<sup>(13)</sup> 15号 (図12-8)

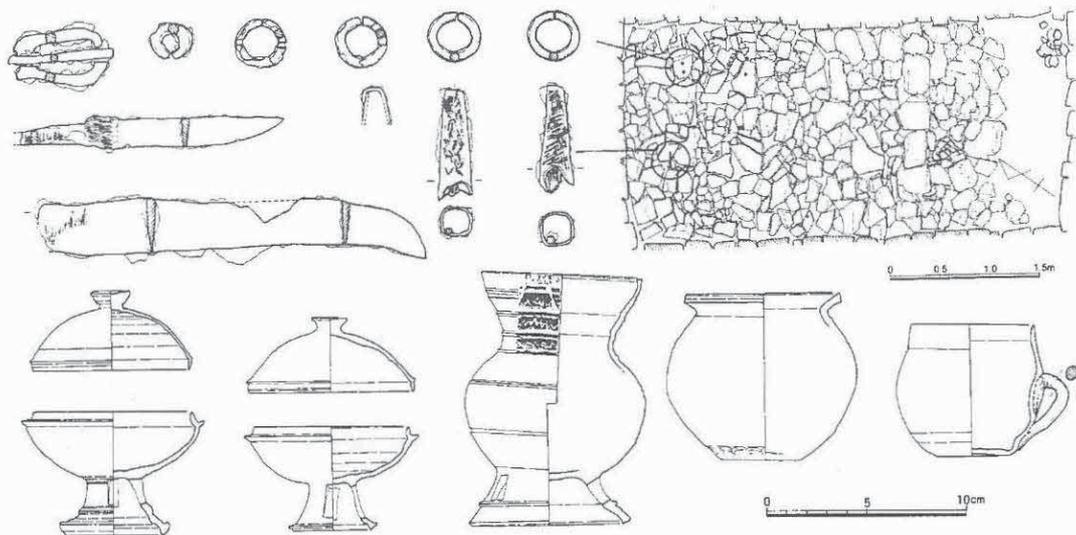


図7 安東・坪八洞1号出土遺物

主軸が北東-南西方向の横口式石室で、石室の規模は長さ300cm、幅120cm、高さ60cmである。鉄鐸は東北側の端壁の下から把手付壺、短頸壺、赤色軟質土器、紡錘車と共に3点が出土した。3点ともみな円筒形で、身部の上下の幅が1:1に近い。舌は断面が円形で、上部が丸く巻かれて輪状を成している。頂部は2点とも欠けており、1点のみが残っているが、1点の状態からみて方形であったと推定される。外面には皮の痕跡が残っている。全長7cm～8.3cm、開口部径1.9cm～2.3cm。

#### (2) 蓴池里23号

主軸が南北方向の横口式石室であるが、石室の規模は長さ370cm、幅120cmで尸床は2次にわけて設置された。北側の遺物の副葬空間には紡錘車、鉄鎌、鏃、刀子のほかに多量の土器類が出土した。一次尸床と二次尸床の上には金製耳飾1対が確認された。鉄鐸は鉄板の両端を曲げて身部を作り、上部の鉄板を折って頂部を設けている。身部の上下の幅は1:1に近く、舌の断面は円形に近い。全長5.9cm～6.3cm、開口部径2.0cm～2.1cm。

#### (3) 蓴池里27号

主軸が東西方向の横口式石室で、石室の規模は長さ360cm、幅120cmである。副葬空間は両端壁部で、鉄鐸は東端壁の下から各種土器類、鉄鏃、鉄鎌、青銅細環、金製耳飾、紡錘車と共に出土した。鉄鐸の

舌は頂部が欠けている。現長4.9cm～6.9cm、開口部径1.2cm～1.7cm。

#### (4) 蓴池里28号(図12-7)

主軸が東西方向の横口式石室で、石室の規模は長さ250cm、幅140cmである。鉄鐸の出土位置に関しては明らかではない。鉄鐸は鑄造製で1点出土した。頂部には円形輪があつて、内面には断面が方形の舌が残っているが、どのような方法で身部と繋げたのかは確認し難い。全長8.8cm、開口部径6.0cm。

この他に蓴池里29号からも鍛造製の鉄鐸1点が出土した。29号は主軸が東西方向の横口式石室で、石室の規模は長さ420cm、幅150cmである。各種土器類と鉄鏃、刀子、耳飾などの遺物が共伴した。

### 7) 昌寧

#### (1) 桂城B地区28-2号<sup>(14)</sup>(図12-9)

主軸が南北方向の横口式石室で、石室の規模は長さ290cm、幅80cmである。鉄鐸は有蓋高杯、刀子、臺付碗、耳飾と共に北端壁部から出土した。鉄鐸は3点出土したが、みな身部の上下の幅が1:1に近い形態で、外面には布の痕跡が認められる。頂部は円形を成しており、中央に0.2mmほどの懸垂孔が空いている。舌は断面が抹角方形で、上部を丸く巻いて輪を作り、繫いで吊るせるようにしている。全長6cm～6.2cm、開口部径2.3cm～2.6cm。

## (2) 桂城Ⅱ地区 28号<sup>(15)</sup>

主軸が東西方向の横口式石室で、石室の規模は長さ273cm、幅78cm、残存高65cmである。床は2次尸床まで確認され、鉄鐸は2次尸床の北端壁側から出土したが、共伴遺物として高杯、紡錘車、刀子、鉄鎌がある。鉄鐸の全体的な形態は円筒形で頂部は円形である。舌は端を巻いて輪を作り、身部と繋げている。全長5.7cm、開口部径2.6cm。

## (3) 桂城Ⅱ地区 40号 (図12-10)

主軸が北東-南西方向の横口式石室で、石室の規模は長さ385cm、幅75cm、残存高44cmである。遺物は南側隅から長頸壺、西南側の長壁から高杯、北西側の長壁の中央地点から蓋杯・鉄鐸・鉄斧、北側隅から鉄鏃、尸床の中央部から金銅製細環耳飾1対が出土した。鉄鐸は2点が出土したが、1点の鉄鐸の中に舌が付いている。2点ともみな頂部が欠けており、その形態がわからない。現長4cm～6.6cm、開口部径1.6cm～3cm。

## 8) 高霊

### (1) 池山洞2号<sup>(16)</sup> (図12-13～15)

主軸が南北方向の横穴式石室で、石室の規模は残存長260cm、幅110cmである。遺物には小型廣口小壺をはじめとする多量の土器類と刀子がある。鉄鐸は石室中央部の西長壁の下から全部で13点が出土したが、この中には鑄造製も3点含まれている。また鍛造製の鉄鈴1点が共伴出土した。それぞれの鉄鐸の外面には布の痕跡が残っているが、特に鉄鈴の外面には布目のつんだ絹類の布跡が観察される。身部の外面にみられる布跡は絹と麻の二種類である。鍛造製：全長6.0cm～8cm、開口部径2.0cm～3.9cm。鑄造製：全長12.3cm、開口部径5.5cm。

### (2) 池山洞26号

主軸が北西-南東方向の横穴式石室で、石室の規模は長さ240cm、幅125cmである。塼甃尸床の上から各種土器類、紡錘車と共に鉄鐸2点が出土したが、みな鑄造製である。身部の内面に舌はない。鉄鐸の平面は上が狭く、下が広いが、断面は六角形に近い。頂部の形態は方形である。鉄鐸の出土位置は後代の攪乱によって明らかではない。また26号石室か

らは3次の尸床の設置の前に火を焚いて何らかの儀式を行った痕跡がみられる。全長12.0cm～12.1cm、開口部径4.3cm～4.6cm。

## 9) 陝川

### (1) 倉里<sup>(17)</sup> B-26号

主軸が南北方向の横口式石室で、石室の規模は長さ255cm、幅240cm、高さ80cmである。土器類は西側の長壁の下から、鉄鐸は北側の尸床の中央部の位置から3点が出土した。共伴遺物としては南側の尸床から出土した鋏(やつとこ)と釘がある。3点中2点の鉄鐸中に断面円形の舌が入っていたことから懸垂孔があったものと推定されるが、これに関する詳細な説明はない。全長5.4cm～5.5cm、開口部径2.5cm～3.5cm。

### (2) 倉里 B-35号

主軸が南北方向である横口式石室で、石室の規模は長さ210cm、幅170cm、高さ70cmである。土器類はなく、鍛造製の鉄鐸7点が並べて置かれた状態で、環頭大刀の柄部片と共に東側の尸床の上から出土した。5点の鉄鐸中に舌が入っていたが、頂部との連結状態に関する説明は省略されている。全長5cm、開口部径約2cm。

### (3) 倉里 B-74号

主軸が北西-南東方向の横口式石室で、石室の規模は長さ330cm、幅150cm、高さ80cmである。各種土器類と鉄鏃、刀子、鉄鎌と共に鍛造製の鉄鐸5点が北端壁側から出土した。鉄鐸は比較的小型で、円錐形に近い。3点の鉄鐸中には断面が円形の舌が入っているが、頂部との連結状態に関して特別な説明はない。倉里古墳出土の鉄鐸の大部分は頂部を別途に作らないで、扇形の鉄板の端を少し折るかまたはそのままにした状態であると推定される。全長5.2cm～6.2cm、開口部径1.4cm～2.5cm。

### (4) 苧浦E地区5-1号<sup>(18)</sup> (図8)

主軸が東西方向の横口式石室で、石室の規模は長さ205cm、幅58cmである。遺物は西側部から各種の土器類の他、有刺利器、鉄鎌、鉄刀子、鉄鏃、錘形鉄器、鎚(ハンマー)、鋏(やつとこ)が出土した。

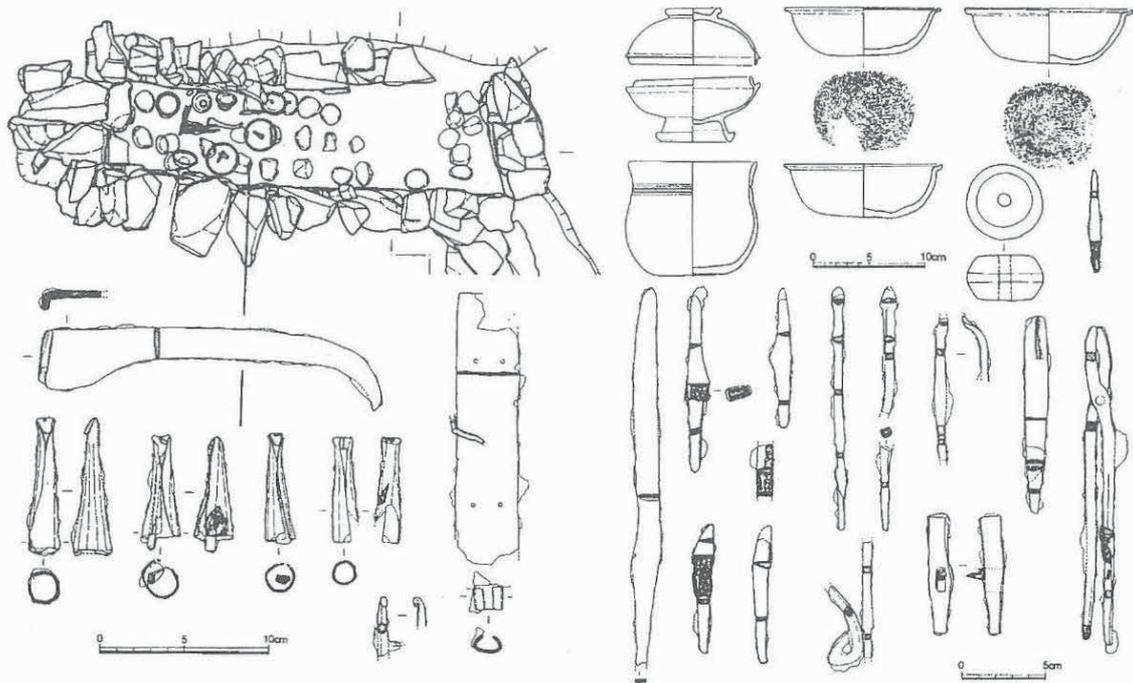


図8 陝川・苧浦E地区5号出土遺物

鉄鐸は全部で4点出土したが、みな円錐形で、頂部を折って身部の上位に逆三角形に被せて巻き付けている。頂部には懸垂孔が残っており、身部の外面に有機物の痕跡があり、皮と報告されている。全長6.4cm～8cm、開口部径1.7cm～2.4cm。

## 10) 固城

### (1) 蓮塘里18号<sup>(19)</sup>(図9)

主軸が北東-南西方向の平面長方形の横穴式石室で、石室の規模は長さ390cm、幅200cmである。石室と羨道の床には人工的な施設はなく、岩盤面をそのまま利用している。遺構の床面から耳飾、紡錘車、鉄鐸、刀子、鉄鏃、土器が出土した。鉄鐸は1点出土したが、上が細く、下が広い円錐形で、頂部は折って巻いている。舌の断面は長方形で、錆着のため身部との連結状態はわからない。身部の外面に小型の鉄板が1点付着している。この遺構からは高霊様式土器と新羅後期様式土器が共伴した。身部長4.3cm、開口部径2.2cm。

## 11) 泗川

### (1) 月城里8号<sup>(20)</sup>(図12-18)

主軸が南北方向の横穴式石室で、石室の規模は長さ220cm、幅154cmであるが、閉鎖石の前方から

36点の土器類が出土した、被葬者の安置と関連した祭儀行為の結果物であろうと思われる。鉄鐸は刀子、不明鉄器、何重にもかさなった状態の小型高杯と盞と共に羨道部から出土した。鉄鐸は4点出土したが、基本的な形態は円筒形で、舌が残っているものは1点もない。厚さ1mmの長方形の鉄板の両端を巻いて、身部を円筒形に作った後、丸く裁断した頂部は折り被せてある。頂部の中央に懸垂孔が空いている。4点のうち2点の外面に草本類が付着していると報告されている。全長4.5cm～5.9cm、開口部径2.1cm～2.5cm。

## 12) その他の資料

以下では嶺南地方以外の地域から出土した鉄鐸資料を参考に紹介したい。

### (1) 坡州 城洞里石室墳<sup>(21)</sup>

主軸が北西-南東方向の石室で、石室の規模は長さ335cm、幅145cmである。石室の構造は明確でないが、横口式と推定される。北東端壁側から金銅製樹枝形帯冠を含めて金銅鉸具、紡錘車などの遺物が出土した。この中で鉄製の棒と報告されている遺物があるが、その形態と記述内容からみて鉄鐸と推定される。片方の端はふさがっており、反対の方は中

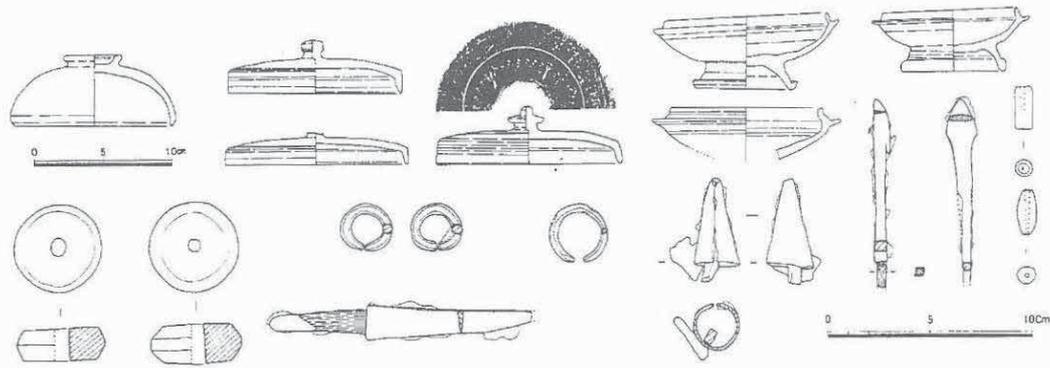


図9 固城・蓮塘里18号出土遺物

に孔が空いている。全長5.3cm、開口部径1.7cm。

## (2) 扶安竹幕洞祭祀遺跡<sup>(22)</sup>

全羅北道扶安郡邊山面格浦里竹幕洞一帯の露天祭祀遺跡からも鉄鐸2点が出土した。この遺跡からは祭祀に使用された刀、鏡、鎧類の石製模型製品が多量に確認された。一方日本の福岡県宗像郡沖ノ島遺跡からも鉄鐸が出土したという報告があるが、この遺跡は竹幕洞遺跡とその性格が類似する露天・岩陰祭祀遺跡である。ここからは鉄鐸以外にも石製模型製品を含めて多量の祭儀用遺物が出土した<sup>(23)</sup>。

その他にも三国時代の生活遺跡である大邱時至4G-3号住居跡出土の例がある<sup>(24)</sup>。遺構の規模は210cm×130cm×5cm～12cm程度で、内部から台付壺、台脚、杯、蓋、鉄鎌、鉄鏃と共に鉄鐸が出土した。新羅地域の墳墓から出土した鉄鐸の中に、大邱蘆邊洞473号竪穴式石槨と金海花亭1号横穴式石室から出土した事例があるが、未だ報告書が刊行されていないので詳細はわからない。但し蘆邊洞473号からは鉄鐸、銅鐸と共に金銅冠が出土したという報告がある<sup>(25)</sup>。また慶山林堂AI-141号木棺墓から出土した鉄鐸がある<sup>(26)</sup>。相伴遺物としては充填土の上部で出土した短頸壺、小型平底壺、鍛造鉄斧、鉄鐸2点がある。鉄鐸はみな鍛造製で、2点とも舌が残っている。鉄板の両端を巻いて円筒形になるように身部を作り、頂部は別途に作らず裂かれている状態である。舌は上部が尖っており、下部になるにつれて太く鈍くなり、断面は円形である。全長8.5cm、開口部径5.0cm、頂部径3.2cm。

以上嶺南地方の墳墓とその他の遺構から出土した鉄鐸について概括してみた。

鉄鐸が出土した古墳の構造は、木棺墓、積石木槨墓、竪穴式石槨墓の例がいくつかあるが、横口・横穴式石室墳が主である。また鉄鐸の出土量は陝川倉里B-26号、B-35号、B-74号の3点～7点、高霊池山洞2号石室の13点のように多量の場合がある。慶州皇南洞106-3番地4号・陝川苧浦E地区5-1号・泗川月城里8号からは4点、慶山造永1B-6号、清道蓴池里15号・27号、昌寧桂城B地区28-2号、梁山北亭里12号からは3点出土した。1～2点ずつ出土した例は慶州新院里2号、慶山造永1B-6号、漆谷多富洞21号、大邱佳川洞168号、金海花亭1号、昌寧桂城II地区28号・40号、安東枝洞2号、梁山北亭里4-カ号・8号・10号などで資料の大部分を占めている。

## 2. 鉄鐸の型式

鉄鐸の型式は製作方法によって大きく鍛造製(A類)と鑄造製(B類)に大別され、頂部の有無とその形態によって次のように細分できる(図10)。

まず鍛造製は、頂部を別途に作っていないか鉄板の端のみを若干曲げた形態がa型、身部の上部に延長された板を折り曲げ付け、逆三角形をなしている形態がb型、頂部を方形に裁断した後に折り被せた形態がc型、頂部を円形に裁断して身部の端を折り被せた形態がd型である。鑄造製は把手の形態によって半円形はa型、方形はb型に区分した。

鉄鐸が出土した墳墓を各型式に当てはめたのが表1である<sup>(27)</sup>。

この表でみられるように6世紀前葉に副葬される地域は慶州、釜山、漆谷、慶山、安東、清道、昌寧を中心とする洛東江以東の地方に限定される。とこ

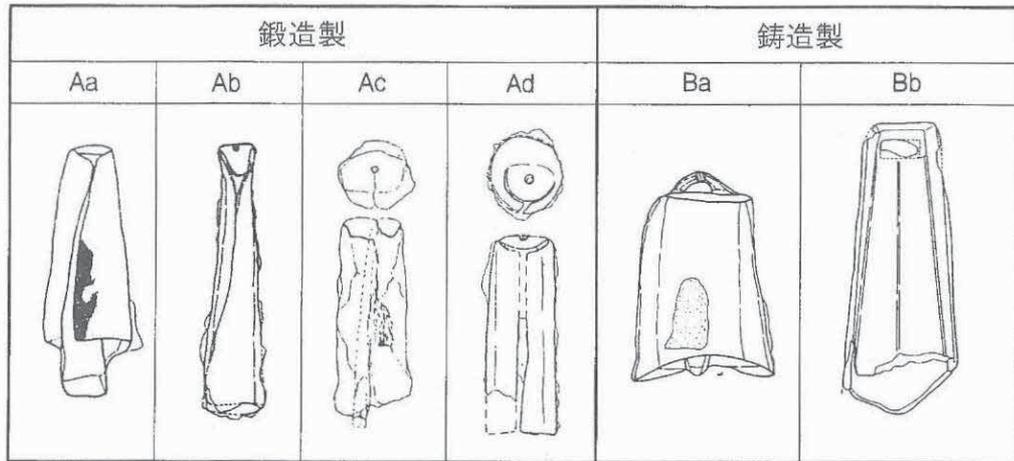


図 10 鉄鐸の類型分類

ろで6世紀中葉には慶州新院里と梁山北亭里のような以東地方の他に陝川倉里・苧浦E、固城蓮塘里のような洛東江以西の地方にまで分布範囲が拡大される。6世紀後葉にも安東枝洞、高霊池山洞、泗川月城里古墳から確認されるなど、分布範囲の拡散現象は持続的に維持される。このように鉄鐸は6世紀中・後葉にかけて新羅に服属された伽耶の故地をはじめ漢江流域まで、新羅に新たに編入された領域へ分布圏が拡大される様相が確認できる。

次に鉄鐸は6世紀前葉にAa型、Ab型、Ac型、Ad型は勿論のこと、鑄造製のBb型も確認されている(表1)。副葬が急増する6世紀前葉に鉄鐸の型式が画一化されていなくて非常に多様である点から各地域で在地生産された可能性が考えられる。一方鑄造製鉄鐸の場合、6世紀前葉の型式は清道蓴池里28号の例から頂部が円形であるBa型が、6世紀後半の資料である高霊池山洞26号からBb型が確認され、現在までの資料からみると、頂部の形態が円形のものから方形のものへ時期的な変化が看取されるが、標本の数は極端に制限されており、断定し難い。以上調べてみたように、鉄鐸は時間的な推移による型式の様相よりは、地域的な多様性の方がより明らかであることが確認できる。

### Ⅲ. 鉄鐸所持者の性格

以上の資料検討からもわかるように、嶺南地方で鉄鐸は6～7世紀代以後に資料が急増し、その中でも6世紀前葉に洛東江以東の地方の各地で資料が集中する傾向が看取される。共伴土器の型式からみて、

6世紀前葉の中でも最も早い遺構は、慶山林堂造永1B-6号で、次に清道蓴池里15号・23号・28号、安東坪八洞1号の順に相対年代を設定できるが、最も早い例に安東枝堂2号、高霊池山洞26号、泗川月城里8号があげられる。

しかし嶺南地方での鉄鐸の起源は、林堂AI-141号木棺墓から出土した資料を通じてみた場合、三韓時期まで遡る可能性がある。ところが現在までの資料では三韓時期から三国時代までの鉄鐸の性格の変化に関する問題と4～5世紀の墳墓から鉄鐸が出土していないという点について説明が難しい状況である。このような資料上の限界のために本稿では鉄鐸の副葬が増加する6～7世紀代を中心に鉄鐸の性格さらに鉄鐸の所持者の職能について接近を試みた。その前に、まず現在までの鉄鐸の所持者の性格に関する研究成果を年代順にみてみると次のようである。

最初に鉄鐸であることを明視したのは、陝川苧浦E地区5-1号の報告である<sup>(28)</sup>。この報告で鉄鐸は人が携帯できるように懸垂孔が繋がって、揺らしたり移動する時に音がするようにしたもので、共伴した有刺利器と共に儀器的な性格の遺物として指摘されたことがあった。朴淳發<sup>(29)</sup>は新院里2号出土の鉄鐸を通じて、当時までに鉄鐸が出土した資料を総合して、鉄鐸所持者の性格を一貫してみないで、共伴遺物の性格を通じて多様な観点から解釈を試みた。安東枝洞2号の被葬者については信仰的な権威を持つ宗教的な権威者、苧浦E地区5-1号被葬者については金槌・鋏(やつとこ)などの鉄鍛治具が共伴するという点をあげて、鉄匠人集団であったものと

遺構名 類型	慶州		慶山	漆谷	釜山		梁山				安東		清道			昌寧	高靈	陝川			固城	泗川		
	皇南洞4号	新院里2号	造永1B6号	多富洞21号	徳川洞C13号	清江里11号	北亭里8号	北亭里10号	北亭里4-カ号	北亭里12号	坪八洞1号	枝洞2号	尊池里15号	尊池里23号	尊池里28号	桂城B28-2号	池山洞2号	池山洞26号	芋浦E5号	倉里B26号	倉里B35号	倉里B74号	蓮塘里18号	月城里8号
Aa型	○		○	○		○					○					○				○	○	○		
Ab型							○		○							○		○						
Ac型		○			○					○		○	○			○								
Ad型						○		○	○						○	○			○					○
Ba型														○	○	○								
Bb型																	○							
段階	I	II	I	I	I	I	I	II		I	III	I	I	I	I	III	III	II	II			II	II	III

表1 遺構別類型の占有様相

推定している。ところが新院里2号出土鉄鐸は芋浦の場合のように、共伴遺物上から鉄匠人が所有していたとする具体的な証拠がないという点と、古墳群内で副葬品の質が比較的に高く、石室の規模も非常に大きいという点から被葬者の性格を新院里古墳群の集団内で社会・経済的な地位があったもの、すなわち当時村社会の豪民層または土豪層であると結論づけている。次に、洪潜植は牛耕の普及と関連して鉄鐸を牛の頸につける鈴であると指摘したことがあるが<sup>(30)</sup>、以後鉄鐸が主に小型墳のみに出土して銜帯金具のような身分の象徴的な遺物と共伴していないという点をあげて、身分的地位が下落した巫俗人の道具であると見解を変えている<sup>(31)</sup>。また、巫俗人の身分的地位の下落はその社会から巫俗が占めている社会的な比重の下落を意味するとも述べている。鉄鐸の副葬年代は、6世紀中葉から7世紀中葉までとみたが、最も早い例は釜山徳川洞C地区20号と漆谷多富洞21号で、最も遅い例は安東枝洞2号としている<sup>(32)</sup>。尊池里古墳の報告者は、全体の遺構の中で4基から出土した鉄鐸の性格を冠、鍛冶具、武器の目立つ副葬様相がみられないという点をあげて、朴淳發が指摘した通り、村社会の豪民層または土豪層であると推定した<sup>(33)</sup>。ここでも鉄鐸の所持者の性格は共伴遺物の内容によって流動的であるものと把握している。最後に佳川洞168号の鉄鐸出土古墳の被葬者の性格を金銅冠との共伴関係に注目して、村司組織内で最高の外位者であり、地方官

の道使の統治に協調した匠尺である可能性が高いと指摘した研究がある<sup>(34)</sup>。

以上の諸研究からは、冠と鍛冶具などのような共伴遺物に比重をおくことによって、鉄鐸それ自体の副葬位置または外形的な特徴のような基礎的な検討が疎かであったと言えよう。上記の研究成果を総合してみると、鉄鐸所持者の性格については、第一に鉄技術の所有者である匠尺身分の集団、第二に村社会の豪民層または土豪層、第三に宗教儀礼を執り行う巫俗人に整理できる。

次に鉄鐸の副葬年代に関する問題をのべる。洪潜植は鉄鐸の出土資料の中で最も早い事例は6世紀中葉代の漆谷多富洞21号と徳川洞C地区20号で、最も遅い事例は7世紀中葉代の枝洞2号とした。しかし、安東枝洞2号は付加口縁台付長頸壺と把手付杯の型式からみて7世紀中葉代まで下るとみるのは困難であると思われる。鉄鐸の絶対年代に関しては現在この時期の資料編年の根拠になる新羅様式土器の編年において研究者同士で見解の差があるので、論じにくいのが実情である。但し、これまでの資料によると鉄鐸の出土墳墓の中で印花文土器<sup>(35)</sup>が共伴した例がないことから鉄鐸の限定的な副葬時期は推定可能である。

鉄鐸の性格を推定するために注目すべき資料には、鉄鐸の出土位置と共に表面に残された絹、麻布、皮などの有機物の痕跡、共伴遺物として出土した退化型式の樹枝形帯冠<sup>(36)</sup>をあげることができる。

第一に、鉄鐸は埋葬空間の両端壁側以外にも墓槨の中央、埋葬空間の上（木槨の上）、羨道部から出土する場合がある。一方、鉄鐸が石槨または石室の中央部から出土するという点については被葬者の腰の付近から装着状態で副葬された可能性が考えら

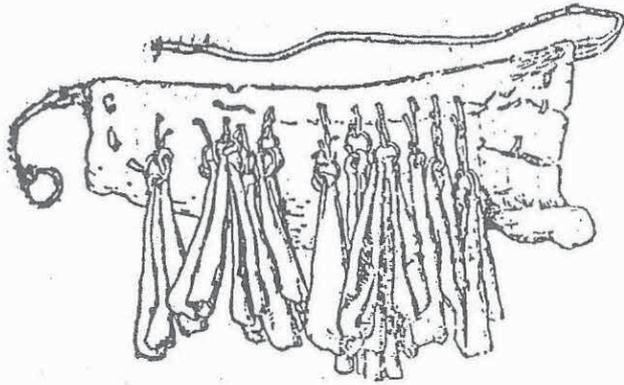


図 11 シベリア・シャーマンの腰の装飾

れる。このような事例としては、林堂造永 1B-6 号、漆谷多富洞 21 号、慶州新院里 2 号、釜山徳川洞 C-13 号、昌寧桂城 II-40 号、陝川倉里 B-26 号、梁山北亭里 4-カ号、安東坪八洞 1 号などがある。木槨の上から出土した場合は慶州皇南洞 106-3 番地 4 号の事例がある。また泗川月城里 8 号の鉄鐸は羨道部から出土した。

第二に、多くの鉄鐸の表面に絹、麻布、皮などの有機物の痕跡が残っており、副葬当時、鉄鐸の周囲が布で飾られていた可能性が非常に高い。分析の対象の殆どの資料から布痕、皮痕が観察された。これと共に紡錘車、耳飾の副葬様相も特徴的である。一方慶州皇南洞 106-3 番地 4 号からは人骨も確認されたが、この分析を通じて被葬者の性別が成年の女性であることが明らかになり、このような鉄鐸の所持者が女性である可能性が高いことを示唆している。鉄鐸と関連した民族誌資料<sup>(37)</sup>には、シベリアの様々な民族の原始宗教と信仰に関するものがある。この中で、シャーマンの衣装には種々の装飾物をぶら下げていたが、種族によって装飾物の種類と衣類の形態が多様である。コルド族の場合は皮製の広い帯に鉄製円錐状の鈴と鏡をつけるという。この鉄製の鈴は平面円錐形で、陝川倉里出土品（図 12-16）とも非常に類似した形態である。今日でも中国の少数民族の巫俗人の衣服には同様の形式の鉄鐸が腰の辺

りにぶら下がっている。

第三に、鉄鐸と共伴する遺物として最も特徴的なものに、退化型式の樹枝形帯冠がある。このような冠が鉄鐸と共伴した資料には安東枝洞 2 号、林堂造永 1B-6 号、大邱蘆邊洞 473 号、大邱佳川洞 168 号、坡州城洞里石室がある。これらの遺構からは鉄鐸がみな金銅冠の近くに隣接した位置に副葬されていた。このような事実は、鉄鐸が被葬者の身分を象徴する遺物であることを裏付けている。金銅冠は 6 世紀前半代まで各地の中心古墳群の最高位階の大型墳から出土することが知られている。このような金銅冠は、中央から地域の首長層へ分与されており<sup>(38)</sup>、これらの副葬は地方勢力が完全に解体していないことを意味するものと理解する見解もある<sup>(39)</sup>。しかし、6 世紀中葉以後の金銅冠は慶州様式の樹枝形立花式を模倣したものではなく、大型墳ではない中小型墳からも出土する点からみて、以前の時期に金銅冠が持っていた政治的な性格とは異なることがわかる<sup>(40)</sup>。一方で、5 世紀代の冠の所持者<sup>(41)</sup>は政治・軍事的な首長であると同時にシャーマンとして国家儀礼で執典者の役割もした。ところがこのような最高位階の首長は、国家体制を整備し、仏教を修行するようになって、政治・軍事的な最高統治権者にその権力が局限され、宗教的な形態の国家儀礼は専門的な僧侶集団に渡されるようになった。この過程で金銅冠は政治・軍事的な意味を喪失して、信仰的または宗教的な側面の意味のみを持つようになったのである<sup>(42)</sup>。その間古代社会における巫の役割と機能については政治的な指導者の諮問に応じて、占トと予言をし、病気の原因を把握して治める多様な儀礼を主管するものであった<sup>(43)</sup>。また巫は国家と社会、個人の次元で発生する様々な問題について殆ど絶対的な意味があった<sup>(44)</sup>という。『三国遺事』の興法編を参考にすると巫<sup>(45)</sup>と僧侶の間に葛藤があった様相が確認される。『三国遺事』と『三国史記』には味鄒王の頃に巫と僧侶が成国公主の病気を治そうとしたが、効果がなかったという記載があり、また善徳女王の時に丞相金良圖が身体の固まる病気にかかったが、巫と僧侶が治療に失敗したという内容が記録されている<sup>(46)</sup>。このような文献記述の内容を通じてみてもシャーマンの存在とこれらの役割についての推論が可能であろう。このような史実と共に

政治的身分の象徴物である銚帯装飾が鉄鐸出土の墳墓から出土しない点に関して巫俗人らの社会的な地位が下落した<sup>(47)</sup>とみる指摘があるが、これについては彼らの身分が非政治的であったために服飾も区別されていたとする観点で理解したい。

#### IV. おわりに

以上のように、6～7世紀代に嶺南地方の墳墓の副葬品として資料が増加するようになった鉄鐸について、遺構の構造、共伴遺物、副葬位置、外面観察などの内容を中心に鉄鐸所持者の性格を推測してみた。以下の何点かにまとめた要約をもって結論の代わりとしたい。

最初に、鉄鐸の出現時期に関しては、慶山林堂の木棺墓の出土例を通じてみた場合、三韓時代まで遡れると思われる。しかし、鉄鐸が墳墓の副葬品として急増する時期は、6世紀初で、以後の時期においても持続的に副葬様相が確認されているが、現在までの資料では印花文土器と共伴する例がないという点で、6世紀代に集中的に副葬され、7世紀の前半以降、急激にその数が減少して行ったと思われる。

二番目に、鉄鐸の分布範囲は6世紀前葉には洛東江の以東地方に限定されていたが、中・後葉を経て、新羅に服属された加耶の故地をはじめとする漢江流域まで、新羅へ新たに編入された領域に拡大する様相が確認される。しかし分布数で見ると、6世紀前葉の資料が最も多く、中・後葉にいくにつれて資料の数が減少する傾向が見受けられる。

三番目に、鉄鐸は製作方法と頂部の形態によって細部的な型式分類が可能であるが、この分類によると、6世紀前葉の鉄鐸はその型式が大変多様であるという点で、これらの鉄鐸が洛東江の以東地方の各地で現地生産された可能性が非常に高いと思われる。

四番目に、今日まで鉄鐸の所持者の性格に対する論議の中で、本稿では専門巫俗人である可能性が高いという観点でアプローチしてきた。これに関しては、鉄鐸の出土位置が被葬者の腰の付近である場合が多く、表面に付着している布の痕跡を通じてこの遺物が被葬者の腰の所に装着された遺物である可能性が高いという点に注目した。また鉄鐸は中に入っている舌のみでも音を出すことができるのみならず、一つの遺構から多量に出土するケースが多い点からこ

れらがお互いぶつかって音を出しながら神霊を呼ぶ機能をしたであろうという点を考慮した。

五番目に、鉄鐸の共伴遺物として退化型式の樹枝形帯冠が出土する可能性があるが、これに関しては政治的な首長権として象徴されていた金銅冠の性格が政治・軍事的な意味を喪失して宗教的な意味のみを持つものにその性格が変化したという点に注目しながら、専門巫俗人の登場の背景を示す資料として理解したい。

#### 付記

本稿を脱稿した後、鉄鐸の所持者の性格に関する以下の論文が発表された。(金在浩、2001年2月、「新羅中古期の村落の成立と地方社会構造」、ソウル大学大学院文学博士学位論文、p187～190)この論文では6世紀中葉以降、各地に出現する退化形式の樹枝形帯冠が鉄鐸と共伴する様相を指摘しながら、これらの所持者は村落内の最高級有力者であるというよりは、信仰的な権威を持つ宗教的指導者として理解している。

本稿で上述した資料の他に退化形式の樹枝形帯冠が出土した遺構は驪州梅龍里5号、丹陽・下里、東海・湫岩洞カ-21号、鬱陵島の資料が紹介されている。梅龍里5号の場合は鉄鈴が共伴されたという。また湫岩洞カ-21号の被葬者は頭蓋骨と歯の分析結果、女性である可能性が提示されている。本稿で上述した慶州皇南洞106-3番地4号出土の鉄鐸の被葬者も女性であったことから示唆するところが大きい。

その他にも大邱時至古墳群の多くの遺構からも鉄鐸が出土したが、本稿では抜けているので、付記しておく。時至古墳ID-10号・44号・47号・71号・121号・150号竪穴式石槨で1～3点ずつの鉄鐸が出土した。共伴遺物の中で特記できるものとしては、ID-44号・71号・121号から出土した有刺利器と47号から出土した金銅冠飾片がある。鉄鐸出土遺構の年代は土器の型式からみて殆どが6世紀前葉であると推定される。

嶺南大学校博物館、1999、『時至の文化遺跡IV』  
学術調査報告第29冊

嶺南大学校博物館、1999、『時至の文化遺跡V』  
学術調査報告第30冊



図 12 嶺南地方の鉄鐮出土古墳分布図

1・2：安東・坪八洞1号、枝洞2号、3・4：慶州・皇南洞106-3番地4号、新院里2号、5：漆谷・多富洞21号、6：慶山・造永1B-6号、7・8：清道・尊池里15号、28号、9・10：昌寧・桂城B地区28-2号、II地区40号、11・12：機張・清江里11号、釜山・徳川洞13号、13～15：高靈・池山洞2号石室、16・17：陝川・倉里B-35号、芋浦E-5号、18：泗川・月城里8号、19：固城・蓮塘里18号

遺構名	構造	規模(cm)	長軸	共伴遺物				
				土器類	鉄器類		装身具類	その他
					鉄鐸	他		
慶州 皇南洞 106-3番地 4号	積石 木槨墓	300× 100×75	東西	有蓋高杯5、高杯3、 蓋3、台付碗1、短頸 壺3、有蓋長頸壺1、 長頸壺3、軟質有蓋甕1	4 鍛造	鉄鋌2、刀子		
慶州 新院里2号	横口式 石室	255×95 ×85	東西	有蓋高杯8、盒9 短頸壺2、 台付長頸壺2	1 鍛造	刀子2	鍔帯一括	紡錘車
慶山 林堂 A I-141号	木槨墓	(墓塚) 207×84 ×49	N-7 6-W	短頸壺、平底壺	2	鉄斧、鉄糸、 異形鉄器		
慶山 造永 1B-6号	横穴式 石室	280× 210×50	北東 南西	有蓋高杯3、高杯4 蓋3、台付長頸壺2、 台付甕	3 鍛造	鉄鋸4、鉄物3、 刀子5、鏝5、 有刺利器、 鉸具、雲珠	金銅冠飾片、 耳飾1対	
漆谷 多富洞21号	竖穴式 石槨	160×50 (?)×50	南北	鉢1、高杯4	2 鍛造	鉄鋸2		紡錘車
大邱 佳川洞168号	竖穴式 石槨	380×90 ×25 (残存)	N-6 0-E	有蓋高杯15、 台付長頸壺2、 軟質甕1、短頸壺3	1 鍛造	有刺儀器、 曲刀子	金銅太環耳 飾、金銅製 樹枝形大冠	紡錘車
釜山 徳川洞13号	横口式 石室	250×97 ×90	南北	高杯11、蓋、 把手付杯1	2 鍛造	鉄鋸2、刀子4、 鉄斧		
機張 清江里11号	竖穴式 石槨	395×145	北西 南東	高杯、軟質甕	1 鍛造	刀子、鎌形刀 子、鏝片	金銅製細環 耳飾1	
安東 枝洞2号	横口式 石室	258× 110×75	東西	高杯3、台付碗4、 把手付杯1、杯1、 台付長頸壺2	2 鍛造	鉄鋸2、 鉄斧、鉄輪	細環耳飾1対、 金銅製樹枝形大 冠、金銅製腰佩、 棒状金具、 異形青銅製品	紡錘車
安東 坪八洞1号	横口式 石室	448× 221×175	北西 南東	台付長頸壺、 有蓋高杯2、 台付碗、短頸壺2	2 鍛造	刀子、鉄鎌、 鉸具、小環	金銅環2	紡錘車
清道 蓴池里15号	横口式 石室	300× 120×60	北東 南西	短頸壺2、 台付長頸壺3、 把手付壺、軟質土器	3 鍛造			紡錘車

表2 鉄鐸出土遺構一覽(1)

遺構名	構造	規模(cm)	長軸	共伴遺物				
				土器類	鉄器類		装身具類	その他
					鉄鐸	他		
清道 尊池里23号	横口式 石室	370×120 ×60 (残存)	南北	短頸壺5、台付長頸 壺9、把手付杯3、 赤色軟質土器16、 台付碗7、把手杯、 高杯5、広口杯2、広 口壺、台付壺セット3	2 鍛造	鉄鏃16、 刀子6、 鉄鎌2	金製耳飾1対	紡錘車
同上27号	横口式 石室	360×120 ×50	東西	台付長頸壺5、短頸 壺10、高杯10、有蓋 高杯6、赤色軟質 土器6、台付碗4、 台付壺2、広口壺	3 鍛造	鉄鏃5、 刀子11、 鉄鎌2	金製耳飾 1対、 青銅細環1	紡錘車 4
同上28号	横口式 石室	250×140 ×300	東西	有蓋高杯14、高杯6、 蓋10、盒2、台付長頸 壺3、短頸壺2、赤色 軟質土器3、台付壺2、 長頸壺	1 鑄造	刀子3、 鉄鏃2、 鉄斧	金製耳飾1対	
同上29号	横口式 石室	420×150 ×60	東西	台付長頸壺5、短頸 壺4、把手付壺、台 付碗5、赤色軟質土 器7、短頸壺3、台付 碗3、高杯8、有蓋高 杯4、台付短頸壺、 高杯2	1 鍛造	鉄鏃5、 刀子、 鉄塊2	金製耳飾1対	紡錘車 2 青銅板 1セット
昌寧 桂城B地区 28-2号	横口式 石室	290×80 ×(80)	南北	有蓋高杯、台付碗、 高杯2、有蓋台付 長頸壺	3 鍛造	刀子	耳飾1対	
昌寧 桂城II地区 28号	横口式 石室	273×78 ×(65)	東西	高杯2、有蓋高杯、 碗2、その他の片	1 鍛造	鉄鏃、刀子、 鉄鎌		紡錘車 5
同上 II地区40号	横口式 石室	385×75 ×(44)	北東 南西	長頸壺、高杯、 蓋杯2	1 鍛造	鉄鏃2、鉄斧	金銅製 耳飾1対	
梁山 北亭里 4-1号	横口式 石室	390×120 ×140	南北	有蓋高杯26、蓋3、 高杯7、長頸壺、有台 長頸壺8、碗4、把杯3、 短頸壺4、軟質小壺、 鉢形器台	2 鍛造	鉄鏃2、 鉄斧2、 鉄鋌2、 鑿形鉄器	耳飾2対 玉2	
同上8号	横口式 石室	380×130 ×150	南北	鉢形器台、長頸壺、 高杯など		大刀、鐙子4、 轡、鉸具6、 円形輪、鑿、 鉄鏃、鉄鋌2	金銅製耳飾、 鍔帯装飾	青銅鈴 1

表3 鉄鐸出土遺構一覧(2)

遺構名	構造	規模 (cm)	長軸	共伴遺物				
				土器類	鉄器類		装身具類	その他
					鉄鐸	他		
梁山 北亭里10号	横口式 石室	350×130 ×140	北西 南東	有蓋高杯10、高杯2、 長頸壺3	1 鍛造	U字形輪、 鏝		紡錘車
同上12号	横口式 石室	260×85 ×110	南北	長頸壺、短頸壺、 高杯	3 鍛造	鉄斧、鉄鋌、 鉄鏃3		
梁山 新基里25号	横口式 石室	280×140 ×70		高杯12、蓋13、有台 長頸壺3、長頸壺1、 短頸壺1、小壺3、 把杯1 その他 片1	1 鍛造			魚網錘 1
坡州 城洞里石室墳	横口式 石室	335×145 ×120	北西 南東	長頸壺3、短頸壺、 把手付杯、有蓋高杯7、 高杯5	1 鍛造		金銅製樹枝形 帶冠、金銅鉸具	
高靈 池山洞2号	横穴式 石室	260×110	南北	高杯2、蓋3、台付碗3、 小壺7、甕1、 台付長頸壺1	10 鍛造 3 鑄造	刀子3		紡錘車 鉄鈴
同上26号	横穴式 石室	240×125	北西 南東	蓋7、有蓋高杯9、 広口小壺1、高杯6、 軟質甕4、附加口縁 長頸壺3	2 鑄造			紡錘車
陝川 倉里B-26号	横口式 石室	255×240 ×80	南北	短頸壺2、蓋1、小壺1	3 鍛造		やっこ(鉄)、釘	紡錘車 2
同上 B-35号	横口式 石室	210×170 ×70	南北	無	7 鍛造			環頭大刀 柄部片
同上 B-74号	横口式 石室	330×150 ×80	北西 南東	有台長頸壺4、長頸 壺2、短頸壺2、高杯3	5 鍛造	鉄鏃、刀子、 鉄鎌		紡錘車
陝川 苧浦E地区 5-1号	横口式 石室	205×58 ×64	東西	有蓋高杯2、碗3	4 鍛造	鎚(ハンマー)、錘 形鉄器、やっこ (鉄)、有刺利器、 不明鉄器 2、鉄鏃 6、刀子 6、鉄鎌		紡錘車
固城 蓮塘里18号	横穴式 石室	390×200	北東 南西	高杯3、蓋4	1 鍛造	刀子、鉄鏃2	細環耳飾、 水晶玉、管玉	紡錘車 2
四川 月城里8号	横穴式 石室	220×154 ×94	南北	有蓋高杯4、短頸壺、 有蓋台付長頸壺、長頸壺 羨道一高杯15、台付碗、 蓋17	4 鍛造	刀子3、棺輪5、鏝 2、棺釘11、 不明鉄器		紡錘車

表4 鉄鐸出土遺構一覧(3)

註

- (1) 崔秉鉉、1992、『新羅古墳研究』、一志社、p506～507  
 洪濬植、1995、「古墳文化を通じてみた6～7世紀代の社会変化—嶺南地域を中心に—」『韓国古代史論叢』7、韓国古代史研究所、p152～153
- (2) 国立慶州文化財研究所、1995、『慶州 皇南洞106—3番地古墳群 発掘調査報告書』
- (3) 嶺南大学校博物館、1998、『慶山 林堂地域 古墳群Ⅲ—造永1B地域—』学術調査報告第22冊
- (4) 慶北大学校博物館・慶南大学校博物館、1991、『慶州新院里古墳群発掘調査報告書』
- (5) 慶北大学校博物館・大邱教育大学校博物館・昌原大学校博物館、1991、『大邱～春川間 高速道路建設予定地域内 文化遺跡発掘調査報告書(大邱～軍威間)』
- (6) 尹善喜・朴珍、2000、「大邱佳川洞古墳群 発掘調査概報」『(財)嶺南文化財研究院 第12回調査研究会』、嶺南文化財研究院
- (7) 嶺南大学校博物館、註3の前掲書
- (8) 釜山直轄市立博物館、1983、『釜山 徳川洞古墳』、釜山直轄市立博物館 遺蹟調査報告第1冊
- (9) 釜山広域市博物館、1998、『機張清江里古墳群』、釜山広域市立博物館研究叢書 第13冊
- (10) 東亜大学校博物館、1994年11月、『考古歴史学志』第10輯
- (11) 安東郡・安東大学博物館・慶北大学校博物館、1989、『臨河ダム水没地域文化遺蹟 発掘調査報告書(Ⅱ)』
- (12) 慶北大学校博物館・慶南大学校博物館・大邱教育大学校博物館、1992「安東 坪八洞古墳群」『大邱～春川間 高速道路建設予定地域内 文化遺蹟発掘調査報告書(軍威～安東間)』
- (13) 大邱教育大学校博物館・雲門ダム水没地域発掘調査団・清道郡、1994、『清道導池里D地域 新羅墳墓群 発掘調査報告書』
- (14) 釜山大学校博物館、1995、『昌寧 桂城古墳群』、釜山大学校博物館研究叢書 第18輯
- (15) 湖巖美術館、2000、『昌寧 桂城古墳群』、湖巖美術館 遺蹟調査報告 第6冊
- (16) 慶尚北道文化財研究院・高靈郡、2000、『大伽耶 歴史館新築敷地内 高靈池山洞古墳群』、学術調査報告 第6冊
- (17) 東亜大学校博物館、1987、『陝川 倉里古墳群』、古跡調査報告 第十四冊
- (18) 釜山大学校博物館、1987、『陝川 苧浦E地区遺跡』、釜山大学校博物館遺蹟調査報告 第11輯
- (19) 慶南大学校博物館、1994、『固城 蓮塘里古墳群』慶南大学校博物館 叢書5
- (20) 慶尚大学校博物館、1998、『泗川月城里古墳群』、慶尚大学校博物館研究叢書 第18輯
- (21) ユントクヒャン、1992、「坡州 城洞里古墳群発掘調査報告書」『統一丘及び自由路 開発地区発掘調査報告書』、慶熙大付設考古・美術史研究所
- (22) 国立全州博物館、1994、『扶安竹幕洞祭祀遺跡』、国立全州博物館学術調査報告 第1輯
- (23) 佐田 茂、1991、『沖ノ島祭祀遺跡』ライブラリー63、ニュー・サイエンス社、p55
- (24) 嶺南埋蔵文化財研究院、1999、『大邱 時至地区生活遺跡Ⅰ』、嶺南埋蔵文化財研究院学術調査報告 第15冊
- (25) 尹善喜・朴珍、註6の前掲文、p125
- (26) 韓国文化財保護財団、1998、『慶山 林堂遺跡(Ⅰ)A～B地区古墳群』、学術調査報告第5冊、p291
- (27) 嶺南地方の鉄鐸が出土した遺構の年代については、これらの型式の比較のみでは不可能であるため、共伴土器の型式を参考にした。ところがこの時期の土器の年代は研究者によって見解が異なる場合が多いことから、ここでは一地域の資料を選定して、これを根拠に相対年代を与えてみた。基準になる資料は、嶺南地方で比較的時期幅が広く資料が確保できる昌寧桂城古墳群にした。この遺跡のⅠ・Ⅱ・Ⅲ段階は其々6世紀前・中・後葉～7世紀初に該当することから、鉄鐸出土の遺構の年代も表1のように対比させた。釜山大学校博物館、1995、註14の前掲書、p262
- (28) 釜山大学校博物館、1987、『陝川 苧浦E地区遺跡』、釜山大学校博物館遺蹟調査報告 第11輯、p78～79
- (29) 慶北大学校博物館・慶南大学校博物館、1991、『慶州新院里古墳群発掘調査報告書』、p72～75
- (30) 洪濬植、1992、「嶺南地域の横口式石室墳研究」、釜山大学校大学院硕士学位論文、p72
- (31) 洪濬植、1995、註1の前掲文、p164
- (32) 釜山 徳川洞古墳のC地区20号からは鉄鐸は出土しなかったが、C地区13号から2点出土したものがある。註8の前掲書、p37
- (33) 大邱教育大学校博物館・雲門ダム水没地域発掘調査団・清道郡、註13の前掲書、p303
- (34) 尹善喜・朴珍、註6の前掲文、p125
- (35) 印花文土器の出現に関しては、研究者の見解の差が大きく、668年新羅の三国統一以後とみる(註28の前掲書、p289)説と、6世紀後半～7世紀初頭(崔秉鉉、1987、「新羅後期様式土器の成立試論」『三佛金元龍教授停年退任記念論叢』Ⅰ(考古学篇)、三佛金元龍教授停年退任記念論叢刊行委員会、p581;宮川禎一、1993、「新羅印花文陶器変遷の画期」『古文化談叢』第30集(中)、p507)とみる説などがある。
- (36) 冠の型式名については以下の論考に従う。  
 咸舜燮、1999「考古資料を通じてみたわが国の古代の冠」『三国時代の装身具と社会相』、第3回釜山広域市立博物館福泉分館学術発表大会・亭亭社;2000、「新羅 樹枝形帯冠の退化型式設定—東垣先生寄贈品を中心に—」『東垣学術全国大会』、第3回国立博物館 東垣学術全国大会発表要旨、韓国考古美術研究所
- (37) ニオラッチェ著・リホンジク訳、1949『西白利亜諸民族の原始宗教』、生活社、ソウル新聞社出版部
- (38) 崔鍾圭、1983、「中期古墳の性格に関する若干の考察」『釜大史学』7、p33～36
- (39) 尹善喜・朴珍、註6の前掲文、p123
- (40) 崔夢龍 外、1998、『鬱陵島』、p125～130
- (41) 『三国史記』によると新羅の王号の中で次次雄は‘慈充’ともいい、邦言に巫を意味する言葉であるが、世人は

巫が鬼神を大事にして祭祀を尊ぶ故に畏敬し、遂に尊長者を意味するという内容がある。金富軾著・李丙燾訳註、1997、『三国史記』上、乙酉文化社、p21

(42) 朴淳發、註 28 の前掲書、p72

(43) 徐永大、1991、「韓国古代の神観念の社会的意味」ソウル大学校博士学位論文

(44) 羅喜羅、2000、「古代韓国のシャーマニズム的世界観と仏教的理想世界」『古代韓国人の精神世界』、韓国古代史学会第 13 回協同討論会発表要旨、p93

(45) 徐永大、1997、「韓国古代の宗教職能者」『韓国古代史研究』12、韓国古代史学会、p203 この論文の中では超自然的な世界と人間世界を交流させて特殊な技術と知識を基に一定の宗教的な課業を遂行する様々な部類の人間を総称して‘宗教職能者’と定義している。

(46) チャンインソン、2000、「古代韓国人の疾病観」『古代韓国人の精神世界』、韓国古代史学会第 13 回協同討論会、p117

(47) 洪潛植、1995、註 1 の前掲文、p164